

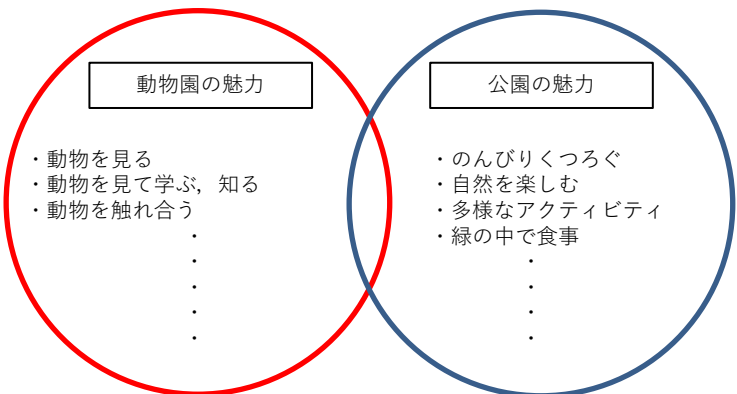
1. 基本設計の策定方針

■ 1-1 整備の基本方針

動物園+動物公園
里山環境+動物園+公園 が合体した、ここだけの楽しさ

里山環境、動物園、公園がもつ魅力を最大限に活かした計画とすることで、「One Health～ひとつの環境、健康～」を体現し、ここにしかない動物公園を目指す。

■ 1-2 基本設計の方針



この場所の最大の特徴である里山・自然の魅力を活かした計画へ。

■ 1-3 事業コンセプト実現のために

人と動物と自然が共生する動物公園
～人と動物が参画する、新しい福祉の形～

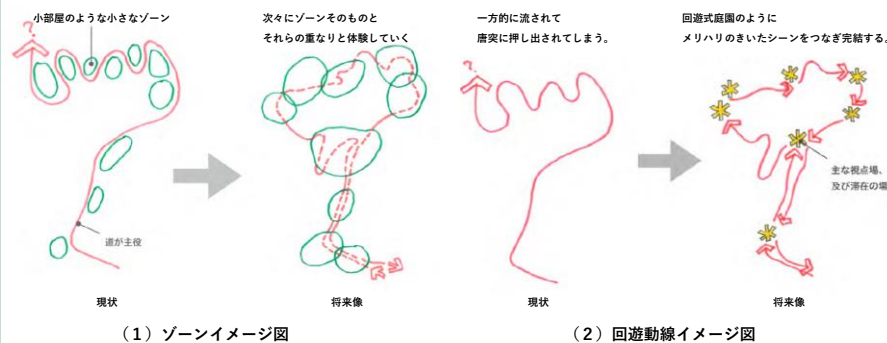
「人」「動物」「自然」が健康であり、互いが幸せに過ごしている空間があることが動物公園の居心地の良さとなり、訪れたいと思わせるきっかけとなることから、施設配置の適正化や、ゾーンの再配置などの風景の骨格作りをランドスケープ設計で行う。

- ① ベースとなる「里山風景」をつくる
 - ・必要のない舗装面をなるべく減らす
 - ・市街地のような刈り込みを無くす
 - ・針葉樹から減らし、視線の抜ける明るい森に変換する
- ② 町から近い「自然の中で楽しめる公園」をつくる
 - ・日常の延長として気軽に何度でも訪れたい場所
 - ・自然の中で多様なアクティビティを楽しめる場所
 - ・子どもだけでなく、大人も、高齢者も自然を楽しめる場所
- ③ 「公園」の中に「動物園」を組み込む
 - ・動物たちの近くでゆっくりくつろげる場所
 - ・風景の一部として動物たちを眺められる場所
 - ・動物たちと一緒に公園にいるような雰囲気

2. 整備コンセプト

■ 2-1 空間の体験

- ① 道路中心の体験からエリアとエリアの重なりによる体験へ
 - ・道沿いの直列型体験ではなく、次々に展開するエリアに誘われ、その中を移動する体験を目指す。
- ② 回遊動線の設定
 - ・回遊式庭園のようにループできる回遊動線を設定し、メリハリのきいたシーンをつなぎ、来園者はストーリー展開を完結まで楽しめる。



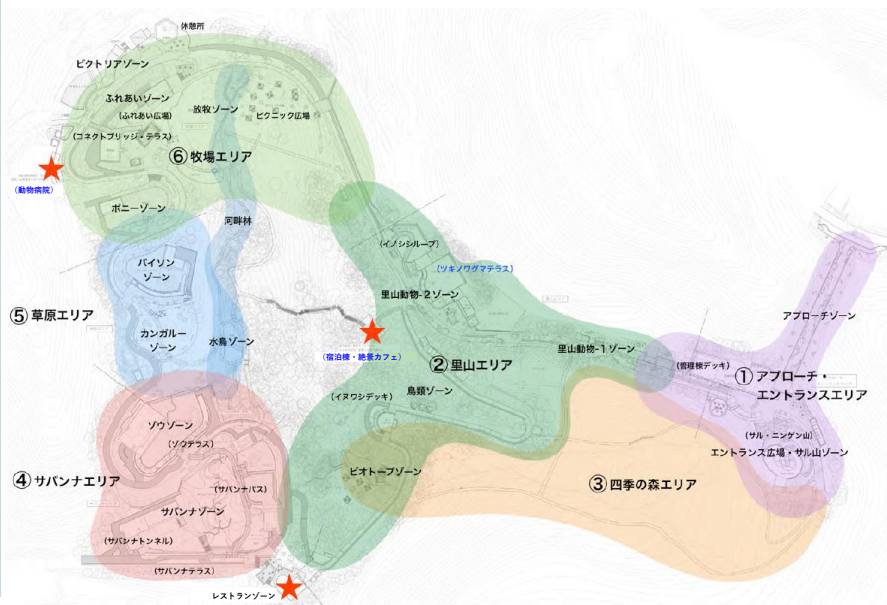
■ 2-2 風景の構成

- ① エリアのレイヤーとして風景を見せる
 - ・複数のエリアを組合せ、奥行きのある魅力的な風景を創出する。
 - ・動物達の姿をできるだけ風景の中にとりこみ、ここに来てしか見られない風景をつくる。
- ② 滞在の場には風景が不可欠
 - ・くつろぎながらおしゃべりしたり、本を読んだりしているとき、人は見て楽しい風景を眺めながら行っている。
 - ・滞在の場の魅力とは、その場自体の魅力と、そこから見える風景とが必ず対になっている。

3. ランドスケープ基本設計

■ 3-1 エリアの再編成

全体の大きなエリアに分け、特徴的なゾーンを創る



ゾーン・エリア図

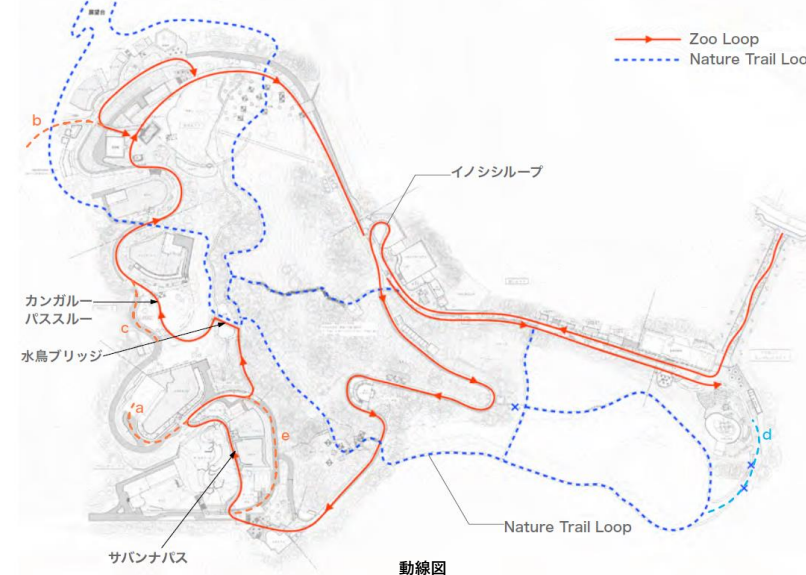
■ 3-2 施設配置について

計画のコンセプトやエリア・ゾーン分け、動物福祉、環境教育に配慮し、既存の環境を活かした獣舎・パドックの拡張や新設、一部展示動物の入れ替え等の配置変更を行う。

項目	内容	備考
ニホンカモシカ	移動	ビクトリアエリア→里山エリア
ニホンジカ	移動	里山エリア斜面の活用、輪牧方式
フラミンゴ	移動	ライオン舎北側へ
サバンナパドック	新設	現フラミンゴ舎の活用
水鳥池	移動	現水鳥池は自然観察場とする
カンガルー	拡張	現芝生広場を一部利用
ラクダ	廃止	ポニーパドック拡張
ふれあい動物園	再編	舗装面を減らす、芝生斜面の放牧活用

■ 3-3 動線の考え方

動物公園の順路（Zoo Loop）と里山散策を楽しむ（Nature Trail Loop）の2つのルートを主要動線として設定する。



■ 3-4 舗装の考え方

- ① 舗装面を一部撤去し、植栽地を増やす。
 - ・里山らしきの演出。
- ② 既存As舗装にペイントする。
 - ・道路感を減らす。
 - ・車道と歩道を区別し安全性の向上。
- ③ 木陰に縁台やベンチを設ける。
 - ・里山の中の心地の良い居場所づくり。

■ 3-5 植栽の考え方

各エリアにおいて、共通の考え方とする。

- ① 針葉樹を減らし、落葉紅葉樹主体の森へ。
- ② 高木の下枝払いを行い、視線が抜ける明るい森へ。
- ③ 道路脇のツツジは伐採を行い、視界の妨げを解消する。
- ④ 林床の周辺部には里山植栽による低木植栽帯を設ける。
- ⑤ 園路上の既存樹木は木陰としての有効活用を行う。

4. 各エリアの設計

■ 4-1 アプローチ・エントランス

- ・アプローチ園路を蛇行させることで、木立を歩きながら里山へ入る期待感を生み出す。
- ・園路タンスゲートの視点からサル山の柵を見えなくなるよう、手前の舗装を芝生のマウンドに置き換え、背後の森と合わせて景観の一部としてのサル山と、それを眺める来園者の階段席「ニンゲン山」を設ける。



■ 4-2 里山エリア

- ・イノシシのパドック内にループ状のブリッジを計画し、鳥類ゾーンへスムーズな誘導を行う。
- ・イヌワシパドックは、既存の森をネットで囲い、ウォークイン展示を行う。



■ 4-3 四季の森

- ・四季の森カエル池の浚渫
- ・Nature Trail Loopの園路は下草刈り程度で、舗装は行わない。
- ・現水鳥池のハクチョウ、カモ類は草原エリアに移動。
- ・池の一部を拡張し、浅い箇所を創ることで、安心して昆虫類や植生などの自然観察ができる環境を作る。

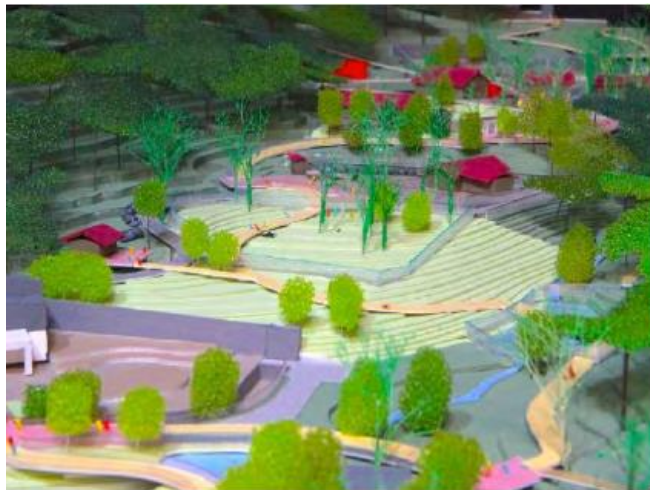
■ 4-4 サバンナエリア

- ・サバンナパス、サバンナテラス、人間パドックなど、動物をより身近に体験できる居場所を設ける。
- ・高木の下枝を剪定し、視線を先へ抜きながら動物たちに木陰を提供する。
- ・獣舎や間知ブロックを塗装し、人工物を目立たなくする。



■ 4-5 水鳥／草原エリア

- ・サバンナ〜沼〜カンガルー/バイソンのエリアを1つの大きな景色として視線が抜けるようにする。
- ・里山環境を楽しみながら、動物に出会うコンセプトを、より強い体験として与える動線とする。



■ 4-6 牧場エリア

- ・現在、ラクダ、ポニー、ふれあい、ウサモル、牧畜などに細分化されている空間を大きな1つの風景として再構築する。
- ・ラクダの展示を取りやめ、ポニーパドックを拡張する。
- ・道路を広場の一部として計画することで、ポニーゾーンと牧場ゾーンを緩やかにつなぐ。

5. 動物の展示，飼育繁殖，収集の基本方針

■ 5-1 基本方針策定の趣旨

「盛岡市動物公園再生事業計画」に掲げるコンセプト『人と動物と自然が共生する動物公園』に基づき、ストーリー性のある展示と動物福祉に配慮した飼育を実現するため、ランドスケープ計画を反映させるとともに、展示方針に沿った現施設の利活用と施設改修、動物の補充や繁殖の実現性に基づき、全動物種の展示、飼育繁殖と収集について検討した。

■ 5-2 動物展示におけるメッセージと飼育展示動物

(1) 里山エリア

日本の野山に生息する動物の存在や自然の中の多様な生態に気付くよう、岩山の自然と一体化した展示とし、里山の動物たちを観察することにより、日本の動物たちと共存する豊かな里山の大切さの理解を深める。

ア 飼育展示動物

ニホンザル、ノウサギ、ホンドテン、ハクビシン、ニホンアナグマ、ニホンジカ、ニホンリス、ホンドタヌキ、ホンドキツネ、ツキノワグマ、ニホンイノシシ、ニホンカモシカ、ニホンイタチ、ニホンキジ、フクロウ、イヌワシ、など

イ 飼育中止動物

アメリカワシミミズク、シロフクロウ、ワライカワセミ、シュバシコウ

(2) サバンナエリア

アフリカのサバンナや生態系に思いを馳せられるよう、間近での観察により形態の特徴や息づかいを体感し、立体的な動きを多方向から観察することにより、生物多様性の再発見を促す。

ア 飼育展示動物

アフリカゾウ、ライオン、シロサイ、フラミンゴ、キリン、グレビーシマウマ、シタツंगा、ダチョウ

イ 飼育中止動物

ショウガラゴ、フェネックキツネ、ケープハイラックス、ヨツユビハリネズミ、ヒョウモンガメ

(3) 草原エリア

迫力ある動物を間近で観察し、特異な進化を遂げてきた動物を同じ空間で観察することにより、野生動物の力強さや逞しさを体感し、生息地の動物に思いをはせるとともに、生物多様性について興味を喚起し理解を深める。

ア 飼育展示動物

アメリカバイソン、アカカンガルー、エミュー

イ 飼育中止動物

プレーリードッグ、アライグマ

(4) 牧場エリア

牧歌的な田園風景を再現するとともに、家畜と人との関りについて理解を深め、動物との触れ合いを通して情操教育に寄与する。

ア 飼育展示動物

カイウサギ、ウシ、ヤギ、ヒツジ、ラマ、アルパカ、コールダック、ニワトリ、ポニー

イ 飼育中止動物

ミーアキャット、モルモット、ロバ、ガチョウ、クジャク、カピバラ、ヒトコブラクダ

(5) ビクトリアゾーン

盛岡の姉妹都市であるビクトリア市との関連性を示し、カナダの動物の多様性や生息環境に思いをはせる。

ア 飼育展示動物

カナダカワウソ、ピューマ、オオツノヒツジ